

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 17号

12月27日(金)

【富山】	富山東高等学校
机上の空	
<p>僕はミソラ。君は小さい頃からお話が大好きだった。そして君が何かを描くときは、いつも決まって僕の上だった。</p> <p>唯一の大道具である机は前を向いていて、「ミソラ」と空色で大きく書かれた名前が印象的だった。しかし、前を向いていることによって、机に座ったミソラ（子）が背中を向けた演技をすることになるが、机に入ろうとするシーンを見せるためにも、机は正面を向いていた方がいいだろう。途中で大黒幕が開いたのは、ミソラ（机）が室内から外の世界へ出たことを表しているように感じた。終盤で空の美しいグラデーションに変化した照明は、シンプルな舞台を空色に染めた。ミソラ（子）が着ていた空色のワンピースはシンプルであったため、一人で複数の役をやってもその役に違和感を与えなかった。ミソラ（子）が描いていた絵は本当に幼い子が描いたように見えていた。その中の絵で、両親と手をつないだミソラ（子）の頭を「爆弾」と母が見間違えたが、その後離婚するつもりでその絵を純粹に見ることが出来ない母の心情を暗示していた。</p> <p>役者は、一人だけで何人もの登場人物を姿勢や声色を変えながら演じていて、演技力の高さを感じた。特にミソラ（子）のおばあちゃんを演じているときには、しゃがれた声からきれいな声に変わったのが、優しく温かい思いを感じた。ミソラ（子）が机に向かっているときは観客に背中を向けていたが、声ははっきり聞こえ、動きを大きくすることで何をしているかが分かりやすかった。</p> <p>『机上の空』の「空」をなぜ「くう」と読むのか、という点が疑問点として挙げた。劇中でミソラ（子）がミソラ（机）の上で日記や絵、お話をかいていたことから、「空」は空白の「空」を表しているのではないか、という意見や、ミソラ（子）自身が描いた空想の「空」なのではないか、という意見も出た。「机上の空論」を元にしていないか、という意見もあったが、劇の内容からは強いマイナスのイメージは感じられなかった。</p> <p>この劇のテーマを「どんなときも誰かがそばにいる」ことだと考えた。ミソラ（子）のお母さんとおばあちゃんが離れてしまっても、ミソラ（机）だけはずっとミソラ（子）のそばにいたからである。</p> <p>自分のそばにいてくれる誰かを大切にしなければならないとも感じたし、自分が誰かのそばにいて大切にしたいと感じた。</p>	